

びょうじやくぐらし。

久里浜燐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、病み上がりの男子がただただ命が惜しくて生き延びようとする話である。

駄文、誤字脱字、原作にない展開、原作キャラ生存注意。

本編七巻までの物語とは矛盾しないようにします。アンソロ穩、壊買いました。

一話は原作キャラ、出ないです！

16.03.21追記：これより先の進行には原作が必要と判断したので申し訳ございませんが当分の間休載とさせていただきます。

16.05.01追記：再開します、長らくおまたせして申し訳ございませんでした。

16.12.18追記：本日にて第一部完結しました。第二部大学編は…お待ちくだ

さい。

17. 04. 16 追記：リメイク並びに第1. 5部執筆を行います。

目次

1話、いきのこり	1
2話、ぶんきてん	5
3話、ぶかつどう	12
4話、えんそく?	18
5話、きゆうゆ	23
6話、こうりやく	26
7話、いきのこり	30
8話、せいぞん	34
9話、きゆうそく	38
10話、たいいくさい	43
11話、ちかしつ	47
11. 5話、ちかしつ (胡桃の場合)	

12話、かいふく	51
13話、おてがみ	60
14話、ほうそう	64
15話、せいぞん	69
16話、ひなん	73
17話、そつぎよう	77

1話、いきのこり

「つたく、この世界はいつたいどうなつてやがんだ……」

久しぶりに見た窓の外の光景に俺は思わず叫んでしまった。

俺は七辻マサ、この春に19歳になった高校三年生だ。

浪人はしていないが留年はした。丁度去年の誕生日に母の頼みで買物に付き添っていたら運悪く車が突っ込んできた。

俺も母もすぐに病院に担ぎ込まれたが元々身体の弱かった上に俺を庇った母親は最善を尽くしたが敢え無く。俺はというと一命を取り留めたものの遺伝か知らないが身体が弱っており、長期入院を余儀なくされた。

そのために、親父が単身赴任していた巡ヶ丘に越してこっちの病院で入院。どうせ進級も卒業も無理とのことで親父が働いてる製薬会社傘下の私立学園に翌年度から三年生として転入した。

その頃には体調も良くなつており、俺の身体の事を知っているのか先生たちも優しくしてくれたため、あつという間に時は過ぎていた。そう、あの日までは。

今日から数日前の事だった。

あの日は、検査で病院に行くためにたまたま学校を休んでいた。

検査はいつもより早く午前中に終わり、医者先生たちは多数担ぎ込まれた救急患者を診るべく俺やそういった人たちを早く帰した。思えば、あの時無理に残っていたら今は生きていない：否、人として生きてはいなかっただろう。

家に帰ってパソコンを立ち上げてオンラインゲーム。昼食を取ったらシヨツピングモールでもふらつこうか：何て考えていたら家に一本の電話が入る。

その電話は親父からで、家に鍵をかけて何があっても家から出るな：今にして思えばあの時は守って正解だったと考えられる半ば命令のようなものを残して一方的に電話を切られた。

隠し事はするが嘘はつかない親父だ。何か凶悪犯罪でもあったのか、それなら後でニュースでも見るかなんてのんきなことを考えながら命令を実行する。その後には部屋に戻ってオンラインゲームからログアウト、SNSで『巡ヶ丘 事件』で出てくると確かにいくつかがヒットした。

『一般市民、謎の暴動！』『巡ヶ丘駅で集団飛込み、運行再開は見通し付かず』などなど：どの記事も、今日書かれたものだった。

病院がパンク、警察機能が飽和状態。テレビをつけると緊急時でものんきな局も入れたすべてのチャンネルで、巡ヶ丘の異常事件を取り扱っている。

どうして親父が俺に連絡を：製薬会社の一研究員である親父が、こんなことを予想できたのか？

ならば、何故？

突然起こったパンデミックかバイオハザード：ゲームや何かの小説で見たようなことが、現実を起こっている。そうとしか考えられない。

だが、そうじゃない可能性も僅かにある：そう、信じたい。

とりあえず俺は、非常食を探すのだった。

そうこうして数日間、親父が買っていた缶詰や即席麺、俺が趣味で買っていたレーションやらで食いつないでいたがそろそろ先が見えていた。

一度豊かな暮らしをすればもう前には戻れない：何かで見た一文が、酷く脳裏に残っている。

電気と水道こそ、太陽光発電と一般家庭にしては大きい貯水タンクが有ったから大丈夫だが他はダメだ。

それならどこかに行つて、また何かあれば戻つてくればいい。

残りの食糧、数丁のエアガン、ノートパソコンとスマホ、それ用のバッテリーやらを

段ボールに詰め込む。

さてどこに行こうかと思つた時にふと脳裏にいま俺が通っている学校、巡ヶ丘学園が思い浮かぶ。

そうと決まれば、善は急げだ。

ワンボックスのライトバンに段ボールを詰め込むと、下手したら二度と帰つてこないだろう家を発つた。

2話、ぶんきてん

「…荒らされてるな。」

それが、事件の後に初めて見た学校の第一印象だった。

だが、親父はここが避難の拠点になると教えてくれた。一人ぐらいは生き残りはいるだろうと、俺は自分の転校先…巡ヶ丘

学院の正門から堂々と車で入ることにした。

「つち、いつばいいんじゃねえか…」

正門は開いていた。だが、感染者が多くうろついている。

「しゃーねえな…」

アクセルを一気に踏み込む。そのまま構内に入りできる限り前面に当てないように避け、サイドブレーキを使ってドリフト

して180度車体を回し、そのまま昇降口の前に後ろ向きに止める。

「…近接戦闘、よーい！」

自身の気持ちを鼓舞するために、叫ぶ。エンジンを切りキーを抜いて、助手席においてあったシヤベルをとりながら車から

出る。

ひとつ、二つ…音に反応するのだろうか、こちらにいくつかが向かってくる。

「遅いっ！」

シャベルを振り上げ、薄い面を首に当て、勢いに任せて切断する。その勢いを殺さずにもう一個の足首を切る。

バランスを崩したところを蹴飛ばす。迫ってきたもう一個にはシャベルを突く。

だが、相手のほうが多い。

もう駄目だ、と思った時だった。校舎から紫色のツイントールが飛び出してきた。

「なにボウっとしてんだ！諦めたらそこで終わりだぞ！」

その声は、俺の意識を一気に目の前の敵に向けた。

「車の中の荷物を運んでくれ！」

校舎の中の人影に、叫ぶ。そして俺は、車の右側…助手席側に走り、荷物搬入を支援する。

紫髪のほうは…徐々に後退を始めている。だが、押されているというわけではなさそうだ。

…これなら、安心して戦える。

あいつらが、来る。遠慮はいらない。守るためだ。自分のモノを、今から住む場所を。

そして、ここの人たちを。

シヤベルが一匹の首筋に吸い込まれるように当たる。そいつの首が飛ぶ。

もう一匹が来る。シヤベルを身体の中心線上に突き立てる。そのまま蹴って無理やりにシヤベルを引き抜く。

「よしっ、退くぞー！」

先ほどと同じ声が聞こえる。後ろを振り返ると、すでに誰もいない。

車の窓越しに紫髪が一気に校舎へ駆けてるのが見える。

俺は再び前を向き、後退しながら奴らに対処できるようにシヤベルを構える。

どうやら足の筋肉が衰えてるみたいだ。そう判断した俺は一気に校舎へ駆け込んだ。

「…すいません、俺の荷物をここまで運んでもらって。」

「いえ、いいのよ…頭を上げて？」

俺が謝った人…国語の佐倉先生は俺にそういった。

「いえ、本当…あんな状況だったとはいえ、命令してしまつて…。」

「まあまあ…とりあえず今は、荷物を上に持つていく方法を、考えましょ？」

「…え？普通に持つていけば…」

「今回は貴方が来たから、できるだけ早く来たのだけど……この二階にはまだ、残つてい
るわ。」

「…なるほど。道理であの紫色の…」

「恵飛須沢さん、かしら？」

「あ、はい…恵飛須沢さんがいないのも、そういうことなんですネ。」

今、ここを守ってるのも恵飛須沢さんなんだろう。

「…とりあえず、進路さえ確保できれば、あとは走ってどうにかかります。ただ…」

ただ、その足掛かりが決定的でないと一気に失敗する。おそらく恵飛須沢さんはここまでの護衛・さっきの輸送支援・今の護衛とおそらく無視のできない疲労が溜まってるだろう。

「…そういえば、台車が中の座席にあったような…取ってきます。」

「え、あ、ちよつと待って！」

…俺はその制止の声を無視して、外に出てすぐにトランクから車に入った。

「…これで、運べるな。」

目当てのものを見つけて、すぐに車から出る。

トランクを閉め、追いつかれないようにすぐに昇降口から中に入る。

「…戻ってきました。これで全部運べます。」

「もう、無茶しちゃ駄目ですよ？」

俺は佐倉先生に咎められたが、この状況で無茶をするなどは難しい。無茶をせねば生

き残れない可能性だつてあるんだ。

「…はは、検討しておきます。」

無茶をしない気はないのだが。

「…とりあえず、この台車の上に荷物を積んでください。露払いはします。」

「ええ、わかつたわ。」

後ろで台車の上に佐倉先生が荷物を積んでるのを見て、俺はシャベルを構えて廊下を見た。

そこに、恵飛須沢さんはいなかった。

「…恵飛須沢さん、戻ってきて!」

廊下に叫ぶ。これで数分たつて戻らなかつたらこちらから行こう…そう考えていたら、すぐに戻ってきた。

「おうつ、どうした?」

「…こここで、佐倉先生の支援をお願いします。」

「へ?」

…明らかに伝わっていない表情だ。説明が足りなかつたか…そう考えた俺は俺の荷物を運ぶ作戦を説明した。

「…よーするに、お前が困になって運ばせるのか?」

「…まあ、そうなります。」

「ふむ…面白い、乗った!」

よし。心の中でガッツポーズをした俺はひとつ、積む前の箱を開けた。

「…これって…」

佐倉先生が目を見開く。

「…趣味、です。」

その中のエアガンを一丁、取り出す。

「もちろん…エアガンですよ?」

「おお、すごいじゃないか!」

恵飛須沢さんは目を輝かせている。趣味なのだろうか?

「…あくまで、自衛・威嚇用です。もつとも、威嚇できるとは思いませんが…。」

…できれば、早く休みたかった。だが、これだけは伝えておかねばならないと思った。

「…おそらく、本来の目的じゃあ二度と使わないと思います。一応、これを持っていてもらえますか?」

9mm拳銃のエアガンを渡す。

「…弾は装填してあります。ですが…今はあくまで自衛用です。威力は無いに等しいと思ってください。」

「…恵飛須沢さん、お願いできる？」

「任せてくれ、めぐねえ。」

会話が、一度途切れる。

「…それじゃあ、俺の荷物を運ぶの、手伝ってください。」

俺は頭を下げる。

「おうっ！」

「ええ…頭を上げてね？」

やっとのことで完全な安全圏での生活が始まった、俺はほっと胸をなでおろした。

3話、ぶかつどう

「…はあ、はあ…」

物資は、三階まで上げられた。問題は…

「だらしねえな、七辻。」

「一応これでも少し前までは入院してたからな…!」

息が途切れ途切れになった俺は、恵飛須沢の体力を羨む。

問題は、俺の体力の無さだった。

「そうよ、恵飛須沢さん。七辻君は去年は大半を病院で過ごしたのだから…。」

「あ、そうなのか？悪いな。」

そういうえば、名前しか話していなかったな。完全に忘れていた。

「まあ…自己紹介は後にして、とりあえずどこかに運びますよ…。」

「ん、おう。そうだな!」

階段を上がってくる途中で聞いた話だ。皆は辛うじて生き残れたらしい。

それで、『学園生活部』として生徒会室を部室として『活動』しているらしい。

「…それじゃあ、校長室…あたりじゃないですかね？」

校長室は確か、生徒会室の前だった気がする。

クラスの教室は使っているそうだ。

また、他にあるのは音楽室や化学実験室は、さすがに寝泊りには向いていないだろう。準備室は…個人的に寝泊りしたくない。

同じ部屋は…いくらこの極限状態とはいえ、異性同士なのだ。俺が困る。

「…片付けてないけど、それでいいの？」

「大丈夫です、佐倉先生。自分の住むところは自分で何とかしますんで。」

それに、校長室には今まで一度も入ったことが無い。

まあ、今年転校してきたばかりで呼び出されるようなことをする時間も、そんな仲間を作る時間も無かっただけだ。

「とりあえず、進入部員になるんだ。先に自己紹介を済ませちまったら？」

「…そうさせてもらうよ。」

俺らが階段を上がって休んでいた理由は、目の前にあるバリケードだ。

「…そういえば、ここにバリケード？」

「ああ、あいつらが万が一上がつてきても、大丈夫なように。」

なるほど。それは一理ある。

「…じゃあ、上を通すか？」

「いえ、一箇所、穴を開けましょう？これからも、このようなことがある…と思うし…。」
「…それじゃあ、工具…出します？」

そういつたら二人は驚いていた。

「え、あ、こういう状況になるのを予想していたんじゃないやなくて…誰もいなかったらバリケードを作らなきゃいけないと思っっていたんで…。」

「お、おう…そうだよな…。」

「そう、よね…。」

とりあえず、箱から金属用の鋏やら金槌やらを取り出す。

「…何が起るかわからないので、少し離れてください。」

このバリケードは…紐タイプのゴムと机でできている、か…。

「…普通のカッターでいける、か。」

箱から普通の大判カッターを取り出し、切るところをガムテープで固定する。

「…何をしてるの？」

「これで、切つてすぐ崩れるつてことを防ごうと思つてます。」

ガムテープを巻いて、カッターで切る。

「つし、予想通り…ここを通しましょう。」

箱に工具とガムテープを戻し、台車を寄せる。

「おう、じゃあ私は向こうで受け取るぜ。」

「…頼んだ。」

バリケードの強度を確認してからひよいひよいと上を超える。身軽なのが羨ましい。

「じゃあ、私は…」

実際、この作業は二人いれば足りる。

「…それなら、先に向こうに行って他の人たちに俺のことを伝えといてください。」

「わかったわ。」

佐倉先生も上を越えていく。…見れなかった、残念。

「…こっちは準備おっけーだ、どうだ？」

はっと、自分のやるべきことを思い出した。

「大丈夫だ、そっちを待っていた。運び入れるぞ。」

実のところ、忘れていた。自分の新生活に関わる重大なものなのに。

「おうよー！」

…先ほどまでの不純な感情を払い、作戦通りに荷物を渡していった。

「…はじめまして、3年D組の七辻マサ、です。」

荷物の搬入を終え、俺は元・生徒会室に挨拶に行った。そこにいたのは…

「久しぶりの新入部員だね、リーさん！」

「ええ、そうね。ゆきちゃん。」

変な帽子をかぶった桃髪と栗色の髪のお姉さん系がいた。

「はじめまして、私は若狭悠里よ。」

「私は三年C組の丈槍由紀！よろしく、ななくん！」

「な、ななくん？…ああ、よろしく。」

言われ慣れぬあだ名に驚いた。

「…貴方、本当にこの学校の人？」

その質問は、若狭さんからだった。

「…今年、転校してきたんです。」

「なるほど、だから見ない顔だったのね。」

…この高校に入ってまだ片手で数えられるだけの月しか経ってないのだ。全員と顔をあわせる時間なんてない。

「で、ななくんはどうして休んでいたの？」

休んでいた…？あの日のことだろうか。

「病院で検査があったから、だけど…」

「その辺りは、後で私が話すわ。だから七辻君は、部屋を…ね？」

そういったのは佐倉先生だった。

「え、あ、はい。わかりました。」

突然すぎて驚いた。とりあえず、いわれたままに動こう。

「それじゃあ、また後で…?」

とりあえず、生存者がいた。それだけで安心できた。

だが、俺は彼女たちのことを、何も知らなかった。

4話、えんそく？

「家計簿？見せてください、若狭さん。」

「……この3日間の生活で、ある程度はこの学園生活部に馴染めてきた。」

「ええ……どうぞ。」

「そこには今の生活必需品とエネルギーの残量が書かれていた。」

「最近曇りがちで、電気が不足してきてるのよね……。」

「……これからのことも考えて、電気を最低限使わずに暮らしてみますか？」

「……そうね、そうしないと……。それに、食料品も少なくなってきたし……。」

「本当だ。俺が持つてきた保存食もほとんど尽きかけてる。5人分なんか考えていなかっただからな。」

「……どうすればいい……？」

「仲良いねー、リーさん、ななくん。」

「おわっ!？」

背後から声をかけたのは丈槍だった。正直驚いた。

「脅かすなよ……丈槍さん……。」

「あら、意外と可愛いところもあるのね…七辻君も。」

「それってどういうことですか！佐倉先生！」

「んでも、いつからお前らそんな関係になったんだ？りーさん、七辻。」

「そ、そんなんじゃないわよ！」

…この賑やかな日常が、今の生活で精神を安らげているんだろうな…。

「そうだ、遠足に行こうよ！」

昼食の後にそういったのは丈槍だった。

「…学園生活部の規則で出ちや駄目でしょ？丈槍さん。」

佐倉先生、ナイス指摘。

「ふっふーんめぐねえ、私思いついちゃったんだ！学校から出ても問題ない方法！」

「それって、何だ？」

確かに気になる。

「それはね…学校行事なら学校を出たことにならない！…よね、めぐねえ…？」

…確かに、中学校でもそんなこといつてた気がする。

「そうだけど…この人数だと手段が…」

「手段なら、俺の車がある。」

…こは、丈槍の案に乗ったほうが良い。いつ食料が尽きるか分からないなら今のうち

に確保したほうが無難だ。

「…駄目？めぐねえ…」

「…仕方ないわね、良いわよ。」

他の問題もあるが…丈槍には言えない。それはほぼ暗黙の了解なのだ。

「分かった！それじゃあ書類作るね！」

そういつて丈槍は寝室のほうへ走っていった。

「な、七辻君！さっきのはどういうこと!?!」

佐倉先生が怒ってる。

「…すいません、でも今俺たちが生き残るには…他の手段はないです。」

屋上の菜園も、そうすぐに身が付くわけではない。それなら、どこか行かねばならな

い。

「…それとも、他に実行できる案があるんですか?」

回答はない。そうだろう。

「ならば…缶詰でも、出来るだけ多くの食料が必要なんです。」

「でも、そんなところは…」

「リバーシティ・トロン・モール。あそのショッピングセンターなら地下に食料品の売

り場があったはずですよ。」

ああいった施設は前の家の近くになかったから、ほぼ毎日のように行っていた。だから覚えてる。

父の会社の傘下で、父と一緒に言ったときは社割が効いたのも、こちらに越してきてすぐの食事も二人でそこでしたのも覚えている。

「…これだけは、絶対にさせてください。この世界で生き抜くために。」
しなければ駄目なのだ、俺は頭を下げた。

「…ええ、分かったわ。本気なのね…。」

佐倉先生が折れてくれた。

「…そういえば佐倉先生、佐倉先生って車でここまで来てますよね？」

「ええ、そうだけど…。」

「ならば、二台体制で物資を運びたいのです。そのために…その車を出してもらえますか？」

少しでも足は多いほうが良い。荷物を一気に運べるほうが良い。

「分かったわ、何とかしてみるわ。」

「…ありがとうございます！」

その一言がうれしかった。俺が頭を上げたところで、丈槍が書類？を持ってきた。これで、準備は整った。

いざ、シヨツピングモール。

5話、きゅうゆ

「…はあ、やっぱりこうなるよな…。」

俺は今、朝からずっと一人で俺の車…ハイエースに乗って、前の佐倉先生のミニクーパーを追っている。

理由は単純に、俺の運転が信用されてないからだ。

まあ無理はない、俺が学校に“登校”した日にこいつで思い切りドリフトをかましたんだ。そんな運転をする車には乗りたくはないだろう

。もつとも、あれはたまたま出来ただけで日常的にはしないが。

「…音楽でも流すかねえ…。」

恐らく前の車じゃあ皆でわいわいやってるんだろなあ、なんて思いながらCDを再生する。

「…ふむ、やはり…こうでなければな。」

気持ちを高ぶらせるような音楽—言ってしまうえば、軍歌だが—を流す。

「…はあ、俺も誰かと会話したかったんだけどね…。」

そんな俺の眩きは、スピーカーから流れる音にかき消された。

「…ん？ルートを外れる？」

前の車のウィンカーが突然光る。

車が道の中に放置されてる可能性も考えて大通りを通ってきたが、まさかここも塞がってるのか…と思っていると、ガソリンスタンドに入っ

入っていった。

「あ…そういうことか。」

普段一人だしな…。

とりあえず、何も考えずについていくことにした。

「…ごめんなさいね、普段からちゃんとガソリン入れておけば…。」

「大丈夫だってめぐねえ、普段は一人だけだからそこまで燃料使わないんだろ？」

佐倉先生の車の隣にとめると、どうやら恵飛須沢が佐倉先生を慰めてる？ようだった。

「あ、ななくん！遅いよ！」

「悪いな。こっちは一人寂しく追ってたから。」

それに、少し疲れた。露払いがいるとはいえこっちだっていつ襲われるか分からない。い。

今も襲われるかもしれない…が、忘れて今は休もう。

「ふう……」

思い切りリクライニングを倒し、身体を預ける。少し眠たいが、まだ大丈夫だ。

これでもうやく休める……そう思い目を閉じた瞬間、窓がノックされる。

「な、七辻君……その……」

「んあ、佐倉先生……どうしたんです？」

大丈夫じゃなかった、寝かけていた……が、そんなことはおいて置いて置いて佐倉先生の話
聞く。

どうやらここはセルフじゃないらしく、使い方が良く分からないらしい。

「……分かりました、何とかしてみます。」

どうやら安心してくれたらしい。だが俺もこういったところで働いた経験がないから
試行錯誤するしかない。

……無事に給油も終え少しガソリン臭くなってしまったが休息もとった俺たちは、
シヨップングモールへ向かった。

そこに何かがあるかはまだ誰も想像できなかった。

6話、こうりやく

「…これより、突入作戦の最終確認を行う。」

俺の車の後部座席を倒した上で、みんなを集めて話し合いをする。

「まず私と七辻でやつらから二階への通路を取る…。」

「その後、すぐに私たちが走って二階へ…。」

「二階へ上る時、殿は俺が務める。」

佐倉先生と恵飛須沢はきちんと覚えててくれたようだ。

「それで…二階の旅行用品のところでできるだけ大きなリュックを取って、安全圏まで逃げる。」

「その後、班分けをして行動を決めるんだよね！」

若狭さんと丈槍も覚えていてくれたみたいだ。

「…確認が済んだところで、作戦を実施しよう。」

恵飛須沢はシャベルを、俺は数丁のエアガンと大型のバールを手に取り、車から出て一気にモールまで走った。

「ちいつ…思ったより数が多いな…！」

このままでと埒が明かない。仕方がないが一気に走ってきてもらおう。

「…恵飛須沢ア！走って一気に上るって伝えてこい！」

「わかった！すぐに戻る！」

俺は通路の確保だ。右手にバールを、左手に9ミリ拳銃のエアガンを構えて臨戦態勢を整える。

まずは恵飛須沢を追いかけようとしてるやつに一発。そいつが振り向いたところをバールで殴る。

「っ…！」

シヤベルで殴った時は気付かなかったが、意外と硬い。

おそらく骨はまだ硬いのだろう。

「…オラあ！」

声を出して一気に殴る。死ななくても吹っ飛んでいく。

…そもそもこいつらに死という概念はあるのだろうか…。

「つて、ヤバっ…！」

後ろの呻き声をよけ、足をバールで潰す。倒れたら、頭と脇腹。

動かなくなったら、障害物として使う…。ここまで人だったものに無情になれる自分

が、恐ろしい。

「…うし、こっから走るぞ！」

恵飛須沢の声で我に返る。そうだ、俺は彼女たちを通さなければならぬんだ。

「準備オツケーだ！早く来い！」

恵飛須沢の今の声で向こうに向いた集中を、もつと大きな声でこちらに寄せる。こちらを見なかった数体は恵飛須沢のシヤベルの犠牲となった。

先陣を恵飛須沢が、次いで若狭さん、丈槍：最後に佐倉先生が通つてすぐに向きを変えて追いかける。

「振り向かずに走れ！」

恵飛須沢の声に従っているのか、はたまた本能的なものか知らないが俺たちは一気にエスカレーターを走り抜け二階へと上つて行つた。

「い、い、い安全…か…。」

肩で息をしながら恵飛須沢が言う。俺達四人には答えるほどの余裕がなかった。

陸上部で走るのを鍛えられてた恵飛須沢がこうなのだ、少なくとも俺は病み上がりだぞ？

「それにしてもやるなあ、七辻。」

「はあ、はあ…よしてくれ、後半は追っかけるだけで精一杯だったんだ。」

「そうじゃなくて、最初の…バールと拳銃なんて、私には無理だ。」

ああ、あれか…と思ったときに、奴らの呻き声が聞こえた。

「…あまり音を立てずに、やり過ぎそう。」

小声でも十分に聞こえただろう、皆は身を屈めて静かになった。

…そうだ、どれぐらいの音までなら聞かれるのだろうか。そう思った俺はポケットの中の小銭を数枚、遠くへ投げる。

小銭が床で跳ねる音がすると、あいつらはそっちのほうへ向かった。

「…これぐらいならいいのか…。」

思わず呟いたその言葉は、あいつらの足音にかき消された。

音を立てず、ゆっくりと忍び寄る。一体だけのようだった。

後ろにつくと、一気にバールを振り下ろす。

勢いがついたのか、頭蓋骨を砕いて中身を撒き散らす。

…先ほどの戦闘で、だろうか…見慣れてしまった。

「…あまり、見ないほうがいいぞ。」

…俺が皆と亡骸に間に入り、見えないようにする。

まだ、シヨッピングモール攻略は始まったばかりだ。まずはこの作戦を終了させない…。

7話、いきのこり

「…俺の予想よりも、機動力が下がりそうだな。」

俺は今、恵飛須沢とともに地下の食料品売り場に来ている。

「悪いな七辻、本来なら私がやるべきことなのに。」

「大丈夫だ、俺よりもお前のほうが近接格闘は得意だしな。」

シヤベルを持って構えてる恵飛須沢に、俺はそう答えた。

先ほども言ったが今は地下の食料品売り場：もつと言うなら缶詰コーナーにいる。

ここに来てから懐中電灯を付けてないので、もうすでに目は暗闇に慣れきっている。

俺は旅行用の大型のリュックいっぱい缶詰を詰め込み、背負う。

「そういえば…そんなに入れて大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、それぐらいは鍛えていたからな。」

それに、逆に走ったほうが物音を立てる可能性が高い。

「…それじゃあ、上の階に行くぞ。」

ゆっくりと、俺たちは階段のほうへ向かった。

「…よし、何もいないな。」

皆と別れた店まで戻ってきた。

「…おーい、めぐねえ！りーさん！ゆき！」

…三人は無事だと良いが。

「あー、おかえりー！くるみちゃん、なくなくん！」

丈槍の声が聞こえた。

「…三人とも、無事でしたか。」

若狭さんと佐倉先生も無事のようにだ、良かった。

ほっと、胸を撫で下ろす。

「…それじゃあ、作戦の第二段階…生存者を、探しましょう。」

「…って、どこ行こうって言うんです？若狭さん。」

一階上のフロアに移動して、若狭さんの指示の元にすぐに向かったのがチェーンの
00均だった。

「ここにも、使えるものがあるかと思って…ね？」

確かに、その発想には至らなかった。

今回俺はあくまで食料と生存者救助を目標としていたが、有事の際の武器になるものも必要だ。ましてやまともな戦力が俺と恵飛須沢の二人しかない状況で。

「…それで、何か見つかったんです？」

「ええ。たとえば、これとか…」

そういつて見せたのが折ると光る…ケミカルライトだった。

「…あいつらつて、暗いと光に寄せられるでしょ?」

「あとは…激しく動いてるものとか、音を立ててるものですね。」

確かに、暗いところならこれは使える。

「そうですね…なら、これとかどうですか?」

防犯ブザーを取って見せる。

「確かに、これも良いわね…。」

「こいつなら、鳴らしてから投げればそっちに気を引けますしね。」

そう言つて幾つかの物をリュックに放り込んだ。

「…それじゃあ、上に行きましょうか。」

「そうね…。」

リュックを背負い直しながら話すと、突然丈槍が声を上げた。

「あ、今何か聞こえた!」

「…そうなの? 丈槍さん…。」

「絶対声が聞こえたよ! めぐねえ!」

「私には何も聞こえなかったぞ?」

「そうねえ、私にも…。」

「嘘じゃないって！聞こえたよね、ななくん？」

…話をこつちに振らないでくれ…。

「…期待を裏切るように申し訳ないが、俺には聞こえてない。」

「そんなあ…。」

「…ただ、行つてみる価値はあると思う。このフロアにあいつらはほとんどいないし、上ならほぼゼロだろう。それに、もともと生存者を探しに来たんだろ？」

「…それもそうだな。よし、行こうじゃないか！」

…それに、何かあつたら上に籠ることもできるしな、とは流石にそれは言う事はできなかつた。

8話、せいぞん

「…バリケードだ。」

ここに、生存者はいらぬ。このバリケードはその一つの証拠になる。

「やっぱ、さっきゆきが聞いたのは…」

「生き残り、だったのね…。」

「とりあえず、早く行こう。」

そう言つて俺は、バリケードを撤去する。段ボール製のそれは、すぐに取り壊せた。武器を構え、突いてくるように指示する。廊下には奴らの影はない。

「…一気に行くぞ！」

声をあげて一気に走る。どうやら居ないようだ。

数本の通路を抜けたところで、物音が聞こえた。

「…生き残りか!？」

そっちのほうに向きを変えて、物音へと近付く。

「この部屋、か…。」

おそらく防災用の倉庫であろう部屋の前に立つ。

「誰かいるか？」

ノックをして、部屋の向こうにいるであろう人に声を掛ける。

どうやら中で何か話しているらしい…と思つたら物を動かす音が聞こえた。

少々待つとドアが開かれた。

「生存者…ですか？」

「…ここで二人で、か…。」

「いえ、二人と一匹です。ね？太郎丸。」

太郎丸、と呼ばれた犬はワンと返事をする。

「…とりあえず、荷物をまとめめて…ここから出るか？直樹、祠堂。」

「できれば、そうしたいです…ね、美紀。」

「そうだね…圭。」

「それじゃあ…長居は無用だな、荷物をまとめていてくれ。俺は少し用事がある。」

このことを、他の皆に伝えないと。そう思つて部屋を出る。

来た道を行つて戻つて、広い通りに入る。

「…いたぞ、生存者。」

「本当かつ！」

「ほらね、私の言つた通りでしょ！」

「そんなことより、早く行ってあげましょ！ 恵飛須沢さん、若狭さん、丈槍さん。」

「そうだな、どつちだ？」

「こつちだ、行こう。」

後ろに速度を合わせるようにして先ほどの部屋まで向かった。

「…よし、帰ろうじゃないか。」

祠堂と直樹を合わせて7人となった俺たちは、荷物を持って非常階段を使い一階へと降りて行った。

だが、順調には行かなかった。

「げ、なんだこの数…！」

「集まって、る…？」

「知らんが、ここを突破するしかないだろ！」

そう言ってエスカレーターに向かつて走った俺は100均で買ったライターの火をつけ、噴き上げる火花に火をつける。

「一気に抜けるぞ！」

エスカレーターを駆け降りるとほぼ同時に腹目が噴き出る。

あいつらが近寄ってくるが、すぐに火がついて、燃え上がる。

「走れ！ すぐ外に車が止まってる！」

佐倉先生の車は往路と同じ、俺の車には直樹と祠堂…と、太郎丸が乗る。

疲れているだろうから横になる広さがある俺の車に乗せるそうだ。

「ちいっ！」

一方向しか対処できない俺の代わりに俺たちに向かって襲いかかるあいつらを倒すのは恵飛須沢だ。

「全員逃げたか？恵飛須沢ア！」

「後はお前だけだ、七辻！」

全員が外に逃げることでよかったらしい。いらぬ装備をおろして一気に外まで走る。

恵飛須沢が逃げ道を確認しながら逃げたおかげで、幾分か通りやすかった。

だがそれでも襲いかかる奴には鉄パイプで頭部を殴る。

そんなこんなで外に出て、俺の車の運転席へ一気に駆け込んだ。

「…ふう、これで…帰れる。」

佐倉先生のミニの後を追うようにして、俺は後輩二人と犬一匹を乗せて学校への帰路についた。

9話、きゆうそうそく

「んー、やっぱ続けて3人も増えれば物資の減りが早いかな…。」

若狭さんの書いた家計簿を見て、ついそんな言葉が出る。

「まあ、ただでさえ7人もいるしな。」

そんな会話を聞いていたのか、祠堂が質問をしてきた。

「三人つて…私たちと、誰です？」

「ん、ああ…俺だ。数日前にこっちに避難してきた。」

そう言うした後輩組は意外そうにこちらを見る。

「え、でも…なんかずっと前から知り合いだっただかのようにお互い話してますけど…」

「そうか？俺、今年こっちに引越してきたんだが。」

そう言う二人はまた驚いたような表情をする。

「それにしても、あのモールの地図が頭に入ってたような…」

「ん、親父と良く行ってたからな。色々と買いに。暇だったら一人でふらついていたのも

あるが。」

「だから、この地図も七辻が書いたんだぜ？」

恵飛須沢が卓上の地図を後輩たちに見せる。

「ま、記憶を頼りにして書いたから正確じゃないところもあるんだが。」

「いえいえ、ほとんどこの図の通りですよ!」

正直、自分ではうる覚えのところも多いからそこまでほめられて悪い気はしない。

「…それで、話を戻そうや。」

そういえば、今俺たちは物資の不足に陥る一歩手前だった。

「そうですね…保存食はあとどれぐらいあるんですか?」

「7人と一匹でおよそ5日分…ってところね。」

残量は見てたが計算はしてなかった。ありがとう若狭さん。

「あれ、そう言えば由紀先輩と佐倉先生はどちらに?」

祠堂が質問をしてくる。

「ゆきちちゃんは今、授業中ね。」

そうか、この時間はあいつ佐倉先生と一対一で勉強してるのか。

「はあ…俺もやらねえとなあ…。」

「でもマサ先輩、学力を使う機会なんてこの先…。」

「あー、いや…丈槍よりは学力つけないと、抜かれたら…なあ?」

「あー…私もそうかも。」

惠飛須沢も同じような感情らしい。

「それじゃあ、勉強会…する？」

「あ…前向きに検討しよう。」

あんなことを言ったが正直、そこまでやろうとは思ってない。うつかの失言してしまった。

「たっだいまー！」

そんな会話の中、部室のドアが勢い良く開かれる。

「おう、お帰り丈槍。」

助かった、空気を変えてくれ。

「あれ、みんな何話してたの？」

「七辻君とくるみちゃん勉強をしたって言ってたのよ。」

畜生、鬼畜若狭め…

「そ、それより物資の方はどうなんだ？」

ナイスパス、惠飛須沢。

「た、確か…もうすぐ底をつくんだろ？」

「ええ、長くても7日ね。」

先ほどは5日と言ってたような…いや、長くて…か。節制に節制を重ねて、だろう。

「だったら、体育祭！」

「え、体育祭？」

「つい、聞き返してしまった。」

「みんなで体動かすと楽しくなるよ！つらい悩みもすつきり！」

なるほど、ストレス発散にも運動はいいと聞く…が、他の皆はどうだろうか。

「…たしかに、いいかもですね。」

「そうだな、最近運動不足きみだし。」

「それに、娯楽も必要なものね。」

恵飛須沢と直樹と若狭さんは賛成派らしい。

「よしっ、過半数だね！」

「待ってくださいい丈槍先輩、体育祭をやるとしてもどこでやるんですか？」

祠堂から質問が飛ぶ。

「え、えーつと…空いてる教室で、かな？できるよね、めぐねえ!？」

「難しいけど…準備さえすればできると思うわ。」

「…だよ！けいちゃん！」

佐倉先生からもできると聞いて嬉しそうに丈槍は言った。

「それにほら、太郎丸だって動きたそうにしてるし！」

「…わかりました。それじゃあ、体育祭…しましょう。」

こうして、顧問一人と部員七人とマスケット一匹に増えた学園生活部最初の活動は、体育祭に決まった。

10話、たいいくさい

「あら、七辻君は参加しないの？」

「たまには休ませてくださいよ、佐倉先生…一応半年ほど前まで病院で過ごししてたんですから。」

今、学園生活部は三階を使って体育祭…のようなものをしている。

とはいっても、徒競走と玉入れぐらいだが。

「ななくーん、参加しなくていいのー？」

「公平な審判が必要だろ、俺はいいんだよ。」

あとはまあ、さつきも言ったように休みたいのもある。

「…つてことなんで佐倉先生も参加してきていいですよ。」

「え、でも私大人だし…」

「…でも殆ど体力に差は無いですよね？」

「うう、そうだけど…」

「それに…」

「それに？」

それに、正直に言つて佐倉先生があの中に入つても他のメンバーと大差ないし…と思つたが、さすがにそれは言わなかつた。

「それに、佐倉先生が入らないと三人三人で別れられないじゃないですか。」

「…そうね、人数を合わせるため…ね。」

納得したのか、向こうのグループに向かつていった。

「七辻先輩、審判お願いしますー！」

「おう、今行くぞー！」

とりあえず、今日は審判だけやって休もう。

「いやあ、今日は楽しかったなあ！七辻！」

「まあ、そうだな、恵飛須沢。」

玉入れは若狭・直樹・佐倉先生チームが、徒競走は一レース目が祠堂、二レース目が若狭、三レース目が恵飛須沢だった。まさか佐倉先生と丈槍が一勝もできないとは…。

「…でも七辻、参加しなくてよかったのか？」

「いいんだよ、体力はねーが力はあるしな。俺が入らないほうがバランスよくわかれた
だろ。」

「だなあ、まさかめぐねえがあそこまで非力だとは思わなかつたし…。」

「七辻くん、シャワー空いたわ。」

「…つてことでちよつくらいつてくる。おやすみなし、恵飛須沢。」

「おう、また明日な。」

さて、今日の疲れを癒そうか…。

「…佐倉先生、何をしているんですか。」

深夜の職員室、そこで懐中電灯を持った先生がいた。

「ど、どうしてここに…」

「質問に答えてください。…もしかして」

前に聞いたことがある。親父がここが有事の際の防災拠点になると話した時に、その時のマニュアルがあると。

「…緊急時の、マニュアル…ですか。」

「どうしてそれを…!」

「…前に言ったじゃないですか、俺の親父がこの学校の親企業に努めているって。」
どうやら、的中したらしい。

「…今まで忘れていて、それで…。」

「ふと思ひ出してみんなには黙って…ですか。」

そう言つて佐倉先生は鍵のかかった棚を開け、マニュアルを取り出す。

「…読ませてください。」

そこに書かれていたことは、大方俺が予想したことでも一番信じたくなかつたことだつた。

「…七辻君、地下室つて…。」

「…明日、行きますか。」

…こんなものを、みんなに見せられるわけがない。俺と佐倉先生はこれの存在を隠し、地下室のことだけを話して皆と探索に行くことを決めた。

11話、ちかしつ

「…つてわけで、昨晚一階を調べてたら…地下への階段があつたんだ。」

「へえ、こんなところにあつたのか…。」

「それで、何人かで物資がないか見てきてほしいのだけど…。」

学園生活部の部室では、朝から会議のようなものが始まっていた。

昨日の夜に俺と佐倉先生が見たマニュアルの存在を隠して、地下倉庫の存在を話す。

事実を隠すのは申し訳ないと思うが、この事実を教えたら…その先のことは、今の俺には考えられなかった。

「…佐倉先生、一つ提案がある。」

「どうしたの、七辻君？」

「だったら、今は俺に出来ることをすればいい。」

「俺が偵察に行く。一応暗い中で行つたんだ、迷わずに行けるさ。」

「え…。」

佐倉先生が驚くのも無理はない。あの後、一人で扉の前までは行つたんだ。

「…大丈夫なのか？七辻。」

「大丈夫だ……とは言い切れないが、必ず帰ってくるさ。」

「……そうか、なら……こいつを貸すよ。」

そういつて恵飛須沢が渡したのは、いつも使っているシャベルだった。

「必ず返しに帰ってこいよ、七辻！」

「おう、任せとけ。」

受け取つて俺は、懐中電灯とモールで手に入れた花火とマッチを持つて、めぐねえに一つ、頼みを言つて地下に向かった。

「ふむ、こつちが備蓄倉庫で向こうが機械室か……」

ドアの前に書かれたプレートと見ながら、マニュアルに書いてあつた地図を頭の中に思い起こす。

「……15人が一か月、か……」

単純に計算すると俺たち7人が二か月過ごせるだけの資材。だが、今はあくまで偵察なのだ。

一階にいた大量のあいつらは、扉が半開きになつていた地下室に何体も来ていた。

呻き声がしたら、そつちをシャベルで切る。構造を確認しながらのその作業は、精神が完全に慣れてしまった。

「っ…!？」

そんなとき、だった。俺が咳をして膝をついてしまう。たった一日休んだだけではこれまでの疲労は抜けないのか。

もともと体が弱かったのに、体を酷使したから。そのツケが、今廻ってきた。

そんな俺の異常に気付いたのか、あいつらは此方に向かってくる。

思うように体が動かない。一つ、二つをシャベルで切ったあと、もう一体と言ったところで懐に入られて、脇腹を噛まれた。

「っ…っの…っ!」

引き剥がして切る。頭がまともに回らない。抗生物質もこの倉庫にあったはずだが、自分で探すことは無理に等しい。

「しゃべる、かえすか…」

そうだ、シャベルだ。シャベルを返さねば…。帰ってくると約束した以上、帰らねば。その後の、俺の判断は、彼女たちに、任せよう。

「もどら、なきや…。」

約束を、果たさねば。痛みの所為かか、ウイルスの所為か…重たい体を何とか部室まで持つて行って、戸を開ける。

「おうお帰り、七つ、じ…っ!」

「な、ななくん！」

そこまでが精いっぱいだった。薄れゆく意識の中で、少しでも伝えなければならぬ。
い。

「ミス、つた…。」

だが、俺の口から出せたのはその一言だけで、他には何も伝えられずにその場に倒れこんでしまった。

11. 5話、ちかしつ（胡桃の場合）

学園生活部の扉が開かれる、あいつが帰ってきたのか。

「おうお帰り。七つ、じ…!？」

さつきまで元気に地下を探索してくると言ってたそいつは、一言「ミスった」と残してその場に倒れてしまった。

「おい、大丈夫か!？」

私はとつさに駈け寄った。脇腹の血痕、そして破けた彼の制服の隙間から見えた歯型。

「…噛まれ、てる…!？」

信じたくないその事実は、彼の服に今も滲んでいる血が現実だということを無理やりにも教えようとする。

「く、くるみちゃん…大丈夫、なんだよね？」

「ゆ、ゆき…。」

私はその質問に答えることができなかった。私に、噛まれると感染するという推測を事実を教えた野間私の目の前に倒れてる彼なのだから。

「と、とりあえず先輩の止血をしないと……!」

美紀の声でフツと現実に戻される。

「そ、そうね! 由紀さんと若狭さんは職員室から救急箱を持ってきて!」

「……めぐねえ、何か隠してる?」

明らかに声が上がってた。動揺かもしれないが、咄嗟に言ってしまった。

「……めんなさい。」

その回答としてめぐねえは、謝罪の言葉と咄嗟に背中に隠したであろう紙の束を見せた。

「……佐倉先生、こうなることを知ってんですか!」

つい、言葉が出てしまう。

「違うわ……昨日の夜、そのことを思い出して職員室を探していたら……」

「マサ先輩と会って、二人でそのことを隠した……ですか?」

「ええ、七辻君が『この情報を知るのは年長組だけでいい』、って……」

「……え、ななくん私より年上だったの?」

意外そうに丈槍が聞く。そう言えば、私も今年引越してきたことぐらいしか知らなかった。

「……本人に聞いた方が早いけど他の高校で二年生が終わる直前あたりから一年ほど、病

院で過ごしてたって…」

「そういえば、言ってたな…」

そのことを、私たちはよく知らなかった。彼も、語ろうとはしなかった。

「…あ、見てください！先輩！」

そんなときにマニュアルを読んだ美紀が声を上げる。

「どうした、美紀？」

「避難区画に、薬があるって…！」

そう言っで見せてくれたページには、確かに防護施設には救急物資があるといった内容のことが書かれていた。

「…行ってくる。」

「無茶しないでください、先輩！それなら、私も行きます！」

そう言ったのは、美紀だった。

「それじゃあ、私のシャベル…使ってくれ。」

「でも、先輩は…」

「私は、七辻が使ってた奴を使う。あいつに直接それを返してもらいたいんだ。」

そう言っ、いつもあいつが使ってた鉄パイプを取る。あいつほど力はないが、転ばせるぐらいはできるはずだ。

「…行くぞ、美紀！」

「はい、胡桃先輩！」

マニュアルの地図は何度か確認した。今も私が背負ってるリュックにそのマニュアルは入っている、が…。

「…これって、七辻先輩が…？」

一本、床にひかれた線が部屋の外から階段を通り地下まで伸びていた。

線の細さからみて、私のシャベルと何とか引きずってもつてきたんだろう。

「おかげで、いちいち地図を確認しなくても済むな。」

目の前の後輩と話しながら、地下室への階段を下りていくが。

「…ねえ、先輩…。」

「どうした？美紀。」

一階に降りていよいよ地下室という時に、後ろから美紀が声をかけてきた。

「…どうして、ここまで一体も会わなかったんですかね…？」

言われてみれば、そうだった。

まだ2階の半分ほどまでしか制圧できてないはずだ。1階なんてもつてのほか、だつたはずだが今はこうして普通に会話できてる。

「…マサ先輩、無茶しすぎですよね…。」

「目が覚めたら、一発殴ってやらないとな。」

そんな会話でリラックスして、地下室への扉をあけた。

「…うわ、暗いな…ここが倉庫か…。」

消して明るくはないがある程度の光がある地下室で、扉に書かれたプレートを書くのは容易だった。

「ですね、早く行きましょう。」

そう美紀に急かされて、私たちは薬を探して上に持って行った。

その最中にあいつらが近寄らなかつたのは、今回の件で七辻に感謝することかもしれない。

12話、かいふく

「っ……。」

体を起して、状況を確認する。地下室で嘯まれてからの記憶が曖昧だ。

ここは、どこかの教室みたいだ。足元に見える教卓と左側に見える黒板、それに右側に見える生徒用の机がそれを教えてくれる。

そして、日の差し込み方から朝だということが分かる。

そこまで考えて身体を起こそうとして、違和感に気付く。手錠が四つ、それぞれ両手両足に嵌められている。

「…まあ、仕方ないか…。」

おそらく皆は寝ているのだろうか…まあ、無事だったらいいが。そう考えながら誰かが来るまで待とうとすると扉の外に足音が聞こえる。

「…七辻、入るぞ?」

その足音は、恵飛須沢らしい。寝たふりでもしてやろうか。扉が開かれて目を閉じる。

「なあ、七辻…早く起きてくれよ…。」

恵飛須沢の手が頬に触れる。若干冷たい。

「っ……！」

つい、声が漏れてしまった。驚いたのか恵飛須沢の手が離れる。

「…起きた、のか…？」

「…ああ、起きてたぞ。せめてカーテンを閉めてほしかったな。」

仕方ない、ばれてしまったなら起きよう。

「ぶ、無事でよかった…！」

恵飛須沢に抱きつかれる。一応、異性同士なんだがな…。

「…それより、早く拘束を解いてもらえないか？せめて両手だけでも。」

「あ、ああ…今開けるよ。」

教卓の上の鍵を取って恵飛須沢が手錠の鍵を四つとも外す。

「…俺は、どれぐらい寝ていた？」

肩を回しながら尋ねる。

「二日、だ。」

あの日はまるまる気を失ってたのか…。まあ、大分休めたおかげで体力も回復してきた。

「…皆は、大丈夫…だよな？」

「うん、大丈夫だ。今から呼んでこようか？」

そう言つて恵飛須沢は部屋を駈けて出て行つた。また、一人か…。

「ななくん！無事だったんだね！」

「おう、軽く気を失つてたがな。」

「良かった、七辻先輩が無事で…」

「心配してくれてありがとうな、祠堂。」

「ほんと、無茶しすぎです！マサ先輩！二階の大半も一人で片付けて…！」

「…げ、バレた？」

「七辻君、当分は休んでね？」

「…善処します、若狭さん…。」

「…ごめんなさい、全部話したわ。」

「そうですか…先生。」

まさか生きてて女の子に囲まれる機会があつたとは…じゃなくて、皆が俺の無事を祝つてくれて、良かった。

「…あ、そう言えばマサ先輩。」

「どうした、直樹？」

「これを…」

そう言われ直樹から俺が受け取ったのは、恵飛須沢のシヤベルだった。

「先輩から、直接返してほしいそうです。」

「はは、そうか…ありがとう。きちんと返しておくよ。」

後輩に約束した手前、破るわけにはいかないな。

「おーい、恵飛須沢あ！」

「ん、どうした七自？つてああ…」

「…悪かったな。これ、返す。」

シヤベルを付き出す。恵飛須沢が受け取る。

「ああ、ありがとう。」

「これで、直接返してやったぞ。」

そう言つてやったら恵飛須沢は笑った。つられて俺も笑う。

「あら、くるみと七辻君…いつの間に仲良くなったの？」

「そ、そんなんじゃないつて…りーさん！」

あ、恵飛須沢の顔が赤くなつて…ふむ。

「ああ、共闘した戦友なんだよ。」

「そうそう…つて違う！同じ部活の仲間！」

そんなこんなでみんなが恵飛須沢をからかった反応を見て、楽しんでいた。

13話、おてがみ

「皆でお手紙、書こう！」

「は？」

ノータイムで疑問をぶつける。

まあ…丈槍が提案をするのはいつものことだが、それはあまりにも唐突過ぎた。

「だから、手紙を書くんだって！」

「丈槍先輩…それだけですか？」

「違うよけーちゃん！手紙を書いて風船で飛ばすんだよ！」

「風船、つて…うちの高校にあったか？」

「たしか、去年の文化祭の残りがあつたはずだけど…中の気体はどうするの？」

「あー、それなら確か実験室か準備室かにヘリウムがあつたはずです若狭さん。こつち来て最初にやつた実験で使つた記憶がありますし。」

「なんかかんやで手紙は飛ばせそうだ。たまにはこういう息抜きも…つて、この間体育祭をやつたばっかだったな。」

「んー…それなら七辻、手伝つてほしいことがあるんだが…いいか？」

「要件によるが…まあ、いいぞ?」

「おう、それじゃあ後で話す。」

恵飛須沢から皆の前で話せない依頼…まあ、今回のことに関わることなんだろう。

「あら、相変わらずの仲ねえ…。」

「ち、違うってりーさん…。」

「…俺と恵飛須沢はいくつもの戦闘を乗り越えてきた戦友でー…。」

「そ、その冗談は前やっただろ!」

そんなこんなで今日の…今俺が心の中で命名した部活会議は恵飛須沢をからかって終わった。

「そんで…手伝うことって、なんだ?」

時間は経って昼飯を済ませた後、部室の前で恵飛須沢に尋ねる。

「風船のこと、だが…購買部の部屋にあるんだ、」

「ええと…確か二階だったよな…?」

「おい、土日に行くモールの構造は殆ど完璧に覚えていて平日通ってる学校の構造は把握しきれてないってどういうことだよ…。」

そう言つて恵飛須沢が頭を抱える。

「そりゃあモールに通うのは、楽しみだし?」

「まあ、そうだけどき…」

「…んで、行くんだろ？ 購買部。」

「おう、そうだな。」

そう言つて恵飛須沢は背中に隠してあつたであろうシャベルを二丁…片方は恵飛須沢ので、もう片方は最初に俺がここに殴りこんだときに使つたものを出し、俺が使つてた方を渡してきた。

「制圧したつていつても、残党はいるからな。」

「だから、これは殲滅専用…つてことだな。」

受け取つて軽く振るう。自分を奮い立たせるために、寒気から来る震えを抑えるために。

「…よし、行こうか。」

「…それで、購買部に行つてきたの？ 二人だけで…。」

「ああ、リーさん。ほら、風船持つてきたぜ。」

「これで手紙が飛ばせるね！」

「ゆきちゃんはちよつと黙つてて？」

さて、俺と恵飛須沢は今若狭さんに怒られている。

理由は単純に、無断で他のフロアに行ったからだ。

「突然いなくなつて、私たちも心配したんですよ？屋上探したりとか…」

「まあ、下のフロアは武器が無かつたので行つてないんですけどねー。」

後輩たちにも怒られる。先輩としての威厳が…。

「まあまあ、七辻君も恵飛須沢さんも無事に帰つてきたんだから…ね？」

「めぐねえ、それは結果論でしょ？」

あ、佐倉先生も落ち込んだ。

「しかも七辻くんはこの前…倒れたばつかでしょ？無茶すぎよ。」

「…はい、申し訳ない…です。」

駄目だ、これ俺が一番怒られるパターンなのだ。

「くるみちゃんも、そんな状態の七辻くんを誘つて…何かあつたらどうする気だつたの？」

「？」

「ぜ、全然考えてなかつた…。」

はあ、と若狭さんがため息をつく。

「…そうねえ、罰として…勉強、丈槍さんに教えられるぐらいしてね？」

…俺と恵飛須沢は、若狭さんの背中に見えたオーラに従わざるを得なかつた。

14話、ほうそう

「あーあー。こちらは空中管制、コールサインはスカイアイ…」

「ちよ、真面目にやってよななくん！」

酷い。少し遊んだらまさか丈槍に真面目にやれと言われる日が来るとは思わなかった。

『おーう！メビウスー、エンゲージ！』

どうやら恵飛須沢はこのネタを知っていたらしい。確かにあいつこういう趣味もありそうだった。

「こちらスカイアイ、交戦許可は出していない！」

「もー、くるみちゃんもなくなくんもー…」

丈槍が呆れてるのをよそに、これと恵飛須沢は本格的ヒコーキごっこごっこをやっていた。

事の始まりは、いつもながら丈槍の発言だった。

「むー…手紙だけじゃ足りないなあ…」

「どうしたの、丈槍さん？」

部室で唸る丈槍と佐倉先生。丈槍の呟きが聞こえた俺はまた嫌な予感しかなかった。

「ねえめぐねえ、情報を発信するとしたら何を使う？」

「そうねえ…ラジオ、とかなら…」

「なるほど、めぐねえ！ありがと！」

そう言つて丈槍は疑問を浮かべたままの佐倉先生から離れ、直樹の元に駆け寄る。

「ねえねえみーくん、この学校の施設でラジオつて流せると思う？」

予想通りだった、嫌な予感とはこのことか。

「え、ええつ…でき、るとは思いますけど…」

軽く頭を抱えている。かわいそうに。

「ふむふむ…みーくんありがとっ！」

満足そうに丈槍はそう直樹に言つてこちらに駆け寄つてくる。

「…全部言わなくても分かった、機材のセッティングはやるよ。」

「わーい！ありがとなくん！」

はあ、放送室は何階だったか…ラジオの配信とか、やったことが無いんだがな…。

「くるみちゃん、七辻君？そろそろやめたら？」

「…」を終わらせたのはいつの間にか放送室に、その俺の背後にいた若狭さ

んだった。

「…あつはい…メビウス1、作戦は失敗だ。」

『ちえつ、メビウス1、帰還する。』

それが聞こえた後、駆け足のペースでの足音が聞こえた。軽く遊んでるな、まだ。

「若狭先輩、セッティング終わりました！…って、七辻先輩、怒られてるんですか？」

なんともまあタイミングの悪いことに祠堂が来た。

「いや、これは怒られてるとかそういうのじゃなくてだな…」

「七辻君がくるみちゃんと一緒に任せられたマイクのセッティングを早々と切り上げて遊んでたでしょ？」

「あつはい…」

この間と言いまと言いま、先輩としての威厳が崩れ切っている気がする。

「作戦失敗だって、スカイアイ！」

勢いよく扉を開けて恵飛須沢が入ってきた。その顔がすぐに青ざめていつてる。

「くるみちゃん、どこ行ってたの？」

俺と恵飛須沢は再び、鬼を見た。

「…じゃあ、また明日？来週？のこの時間も、オンエア楽しみにしててね！」

ふう、終わった…ヘッドセットを外して力を抜く。

「…待って、七辻君！何か聞こえた！」

「…え、マジで!？」

佐倉先生に言われて慌ててヘッドセットを付け直す。

『こちらメビ…じゃなくて恵飛須沢！ヘリが一機いる！形式までは判別不能！七辻、屋上まで来てくれ!』

「ああ、分かった!…佐倉先生、ここお願いします。有事の際はすぐに逃げてください。」

「え、ええ…分かったわ、七辻君。」

俺は再びヘッドセットを外して階段を屋上まで一気に駆け上がった。

「り、りーさん…怖い…」

「大丈夫よ、ゆきちちゃん…?」

屋上で最初に見たのは震えてる丈槍を抱きしめてる若狭さんだった。

「おーい、七辻！あれだ！」

呼ばれて振り返って恵飛須沢の方を見ると空を指差している。そちらを見ると一機のヘリコプター…UH-1が飛んでいた。

「…UH、1…J!？」

立川の自衛隊が？いや、国籍マークがついてない。

どこかのゲリラが？PMCが？俺の頭の中を様々な推測が駆け巡るが、どれも決定的なものではなかった。

「…あ、落ちるぞー！」

意識を戻したのは、恵飛須沢の叫び声だった。

フラフラと機体が揺れたかと思えば、そのまま失速していく。

ローターの回転が止まって、機首を下にはぼ垂直に降下していく。その先にあったのは…

「校庭だ、校庭に落ちるぞー！見てくる！」

そう言ってさっき駆け上がったばかりの階段を下りる。後ろから二人付いてくる気配があるが、誰かを確認する余裕は無かった。

佐倉先生は、異変に気付いたのだろうか。無事に逃げているのだろうか。それだけが心配で、ただ放送室まで走って行った。

15話、せいぞん

勢いよく放送室の扉を開ける。

「佐倉先生！」

俺が呼んだ人は机の下に身を隠していた。

「い、今のつて…地震…？」

「違います！…とりあえず早く外に！」

手を取って引つ張るように駆けだす。

「あ、七辻先輩！めぐね、佐倉先生は…無事、そうですね。」

「それより早く外か地下に逃げるべきだ、直樹！」

「あ、はい！」

後ろから追いかけてきたらしい直樹と、その後合流した恵飛須沢を含めて四人で一気に外に出る。

「…あんなデカい音だから、寄ってきたのか…？」

あいつらは、先ほど墮ちたへりに群がっている。恵飛須沢の言った通り、墜落の時の

音が原因だろう。先生と直樹には近社の前で待つていてもらって助かった。

「…なんか使えるものがあるかもしれない、探す。恵飛須沢、援護頼んだ。」

恵飛須沢の返答を聞かずシャベルを構えてヒューイの残骸に近寄る。

「拳銃…9ミリか。」

殆ど同じ形状のものを懐から出して見比べる。

「…実弾、だろうな。」

構えてみて、思う。何かが違う。心理的な、重みだろうか…。

「…他は…残骸につぶれてる、か。」

仕方がない。回収は困難だしそうと分かれば早く校舎の中に逃げよう。

拾った9ミリけん銃と先ほど出したエアガンを懐に入れる。

「おーい、戻るぞ。恵飛須沢。」

そう言つて駆け寄ろうと数歩踏み出した瞬間だった。

俺の体が身体が前方に吹き飛ばされるのと同時に、爆音が耳に入る。

その勢いで身体が一回転する。ちょうど半分回った時に目に入ったのは炎上するU

H—IJだったものだった。

着地しなければ。咄嗟に使えるものは無いか。思考を頭の中が駆け巡る。

駄目だ、エアガンと9mmじゃあ何もできない。それならば少しでも着地を安定させ

るような体勢を取らねば。

「おらあつ……！」

膝をばねにして衝撃を吸収して接地、そのまま手を付いて倒れないようにしながら四肢でブレーキ。

「……つはあ、はあ……。」

咄嗟に思いついたが本能的にとはいえ出来るとは……何事もやってみることだ。

「おーい、恵飛須沢……大丈夫か？」

どうやらあいつらは燃え上がるUHに群がっているらしい。

恵飛須沢はその場に座り込んでいる。

「え、ああ……よく、無事だったな……」

「偶然だよ偶然、お前は無事か？」

手を取って引き上げる。恵飛須沢はシャベルを杖代わりにしてひっぱられながら立ち上がる。

「あ、ああ……無事だ、ありがとな。」

「……そうだ、先生と直樹と合流しないとな。」

その後合流したら、校舎の方の二人には心配されていた。

こればかりは俺たちのせいではないと反論したら直樹に

「そもそもあんなものに近付いたのが悪いんです。」
と言われた、悲しい。

16話、ひなん

「…にしても、どうするよ…。」

いくら爆破四散したヘリにあいつらが集まってるとはいえ、そもその量が違う。

「…あー、どうにかしてこの状況を脱せないかねえー！」

こっちに向かってくるのも少なからずいる。

直樹と先生を守りながら恵飛須沢と共に戦うなんてほぼ無理に等しい。

そんな瞬間だった。

『訓練火災でーす！』

ふと、放送が流れる。

『めぐねえ！くるみちやーん！みーくーん！ななくーん！わたしたち、先に避難してるよー！』

スピーカーのほうにあいつらが寄っていく。俺たちのことに、目もくれず。

『安全な場所に避難して、また後で会おうね！』

…安全な場所、おそらく地下だろうか？あそこならもともと避難施設として作られてたから安全なはずだ。

「おーい、七辻！おいていくぞ！」

はっと気が付くと校舎の中から恵飛須沢が呼んでいた、置いて行かれるのはまずい、追いかけなきや。

慌ててバリケードを越えて追いかける。

「ま、待ってくれっ！」

階段を下りたグループを追いかけて階段を下る。

「…熱っ！シャツターが熱せられてる…」

地下1階の備蓄倉庫前で追いついたら、何やらシャツターの前で立ち止まっていた。

「おう恵飛須沢、どうしたんだ？」

「ええと、七辻くん…シャツターまで火が回ったみたいで…」

「ふむ、そうですか先生…どれどれ…っ！」

シャツターに触れると熱さでつい手を放してしまう、だが我慢できないほどではない。
い。

「おらあつ…！上がれえ！」

気合でシャツターを上げる。そこには丈槍がそれなりの装備で立っていた。

頭にはケミカルライト、手にはバットを持っていた。というよりそのバット振り上げて構えていた。

「…あ、めぐねえ！くるみちゃん！みーくん！ななくん！無事だったんだね！」
そういつて丈槍は佐倉先生に抱き着く。

「…おーい丈槍、再会を祝つてるところ悪いんだが他の二人はどうなった？」

「あ、りーさんは寝ちやつてて、けいちゃんはその付き添いしているよ？」

三人とも無事で、安心した。

ほつと、安心したところで力が入らなくてその場に倒れてしまった。

そういえば最近、体は休めていたが頭はフル回転だったなあとか、さつき外であんな無茶をしなければよかつたなあとか、そんなことを倒れながら考えながら、俺の心配をする声を聴きながら体が地面に痛みを伴つて接触した。

「ついで！」

「おー七辻、なんだ、気を失わなかつたのか。」

「ちつとは心配してくれ…」

重い体を引きずりおこしながら答える。

「だ、大丈夫なの？七辻くん…少し休む？」

「あー…そうさせてもらいます。」

佐倉先生にそう言われて、休ませてもらうことにする。

「…あと、水をもらえます？」

「ほら、ななくん！これあげるよ！」

すぐに丈槍が走ってペットボトルの500ミリリットルの水を渡してくれた、優しい。

それを飲みながら俺はいつの間にか眠ってしまった。

17話、そつぎよう

「…え、あれ…?」

どうやら俺はいつのまにか寝ていたみたいだった。隣には500ミリのペットボトルが蓋を開けて中身を零しながら倒れていた。

すこし勿体ないことをしたな、なんて思っていたら向こうから佐倉先生が歩いてきた。

「七辻くん、起きた…?」

「ええ、大丈夫です。ほら、この通りに」

手を軽く握って開いたり、起き上がって跳んだりすると、佐倉先生は安心したかのように一息つく。

「…あれ、そういえば他の皆は?」

「えつとね…丈檜さんが、学校の掃除を提案して…ね?」
なるほど、確かに丈檜なら提案しかねないな。

「それで…みんなは校舎、ですか」

「私は七辻くんを見て、って言われちゃってね…」

「それじゃあ、もう監視義務も終わったことですし、合流しましょうよ」
「えっと、そのことなんだけどね…?」

そういうと佐倉先生は背中後ろに持っていたクリアファイルを見せてくれた。

「年長組は、卒業証書でも書いて? って言われちゃって…」

…病弱もんと佐倉先生に片付けみたいな肉体作業は難しいって判断されたか。そう思いながら、佐倉先生と共に…佐倉先生のミスを訂正していくようにして本来使うべきの2倍の消耗品を使って人数分の卒業証書が完成した。

「それではこれより、巡ヶ丘学院高校の卒業式を執り行います」

…日の差し込む教室では、なぜか俺が進行役で卒業式が行われていた。

原稿は佐倉先生と若狭さんが作つたらしい。完璧すぎてとても悲しくなってくる。

「…在校生式辞」

「はいっ」

直樹が返事をして教卓に立つ。こういった時の内容は大体聞き流しているが、要約すると学園生活部の先輩方、佐倉先生、ここまで直樹に付き添っていた祠堂に礼を言うものだった。

「…えー…続いて、卒業生式辞」

「はいっー！」

今度は丈槍だった。若狭でも問題はないと思っただがどうやら知らぬうちに決まっていたらしい。

確かに、ここがあるのは丈槍の功績が一番大きいからな…と、そんなことを考えながら学園生活部での生活を思い出していると、いつの間にか終わっていたらしい。皆が涙を流していた。なんか申し訳ない。

「…え、えーと…せ、斉唱っ！」

CDプレイヤーから伴奏を再生させる。涙も収まったのかそれぞれ歌いだす。涙の卒業式もいいが、やっぱり最後くらいは笑顔でないと。

曲の演奏が終わり、証書の授与を佐倉先生がして、ここに卒業式が終わった。

だがまあ、まだ荷造りやら何やらが残っているから当分はここにしていることになるだろうし、ここの次にどこに行くのかをまだ決めてないから、そこらへんも話し合わないと…

「七辻くんっ、車出して?」

「…え、佐倉先生…荷造りとか、つて…?」

「七辻くんが寝ていた三日間で終わってるわよ?」

まさか自分が三日も寝ていたとは……まあ、療養のために休んだと思えば幾分かは楽だ。

とりあえず今は、次の目的地に向けて運転することを考えないとな。